

# 多くの人に学ぶ喜びを伝えたい

—大好きな歌を通して、広がり深まる学びの世界—



歌手

たしろ みよこ  
**田代 美代子**

ジャーナリスト

いけがみあきら  
**池上 彰**(聞き手)

一九六〇年代に大ヒットした歌謡曲『愛して愛して愛しちゃったのよ』でその名を知られる田代美代子さん。シャンソン歌手から歌謡曲歌手へ、そして闘病を乗り越え、大学院受験、東日本大震災を経て改めて歌の本当の力を知ったとお話くださいました。世界寺子屋運動に関わるなかでの未知の世界との出会い、世界を知ることによって生まれる新たな学びへの意欲。田代さんが歩んできたのは、学ぶ喜びを知る旅でした。

●歌やお芝居が大好きだった私が  
シャンソンを始めたきっかけ

**池上** 田代さんというと、大ヒットした『愛して愛して愛しちゃったのよ』(一九六五年六月、マヒナスターズと田代美代子)の印象が強いのですが、歌はどのようにして始められたのですか？

**田代** 中学校、高校では北九州におりまして、ミッシェンスクールに通っていました。英語と音楽に熱心で、朝な夕なに賛美歌を歌う学校でした。

**池上** 最初の音楽は賛美歌ですか。

**田代** ええ。でも、音楽はどれも好きでした。アメリカンポップスが日本に入ってくると憧れて歌っていましたし、お芝居も好きでしたよ。あるとき、シャンソン歌手のイベント・ジローさんがフランスから来日して福岡にいらしたのですが、そのときに初めてシャンソンを聞いて、大好きになりました。  
**池上** シャンソンは歌っているようであり、語りかけているようであり、ドラマ性もありますね。

**田代** それに、日常が歌になるのが新鮮でした。朝起きてトマトのサラダを食べたことが平気で歌になってしまふ(笑)。とても魅力を感じました。

**池上** それがきっかけでシャンソンを学びたいと？  
**田代** その後、大学の演劇部のお稽古で帰りが大変遅くなって、親から「お芝居を辞めなさい」ときつく言われましたので、「辞める代わりに、ひとつ好きなことをさせて欲しい」と交換条件を出したのです。それが、シャンソンを学ぶことでした。

**池上** ご両親は、それならいいと？

**田代** 日本にシャンソンを普及なさった石井好子先生に習いたと言いましたら、「あの方は立派な方だし、人生勉強にいい」と。それで、ご自宅にお願いにうかがったら、「お弟子は取らないんですよ」と前置きをして「何か歌ってごらんなさい」と言われましたので、『バラ色の人生』と『愛の讃歌』、今思えば厚かましい歌を選んで歌ったわけです。

**池上** 定番ですからね(笑)。

**田代** そうしたら先生がもうびっくりなさって。「あなた、本当にレッスンしたことないのね。じゃあ、見てあげる」とおっしゃったんです。

**池上** ははあ。人生わからないものですね。

**田代** 先生は後日、「他の先生の癖がついていなかったから、これはちょっとやってみようと思ったのよ」とおっしゃいました。

**池上** テレビ局も、学生時代にアナウンスの学校などに通って練習している学生は癖がついているので採用しない、ということもあります。磨けば上手になるなどという人を採用して会社で育てるんです。石井先生も、磨けば光ると見込んでくれたんでしょうね。

●病を乗り越えた歌への想いと  
厳しかった母との思い出

**田代** けれど、親は普通の会社員で、芸能界なんて選択肢にありません。私もまだ歌手になる気持ちはありませんでした。ところが、十九歳のときに先生の勧めで、有名なシャンソン喫茶「銀巴里」で歌うことになりました。もちろん親には内緒です。

**池上** 「銀巴里」はシャンソンの登竜門ですね。美輪明宏さんも歌っていましたが、寺山修司さんなども演出されていたことがありますね。お客さんも耳が肥えていたでしょう。

**田代** 歌詞を間違えるとお客様が教えてくださいました。厳しさもありますが、歌手を育てようという姿勢で温かく見守ってくださいました。その後、ミケランジェロ・アントニオーニの『赤い砂漠』という映画の主題歌でカンツォーネを歌ってデビューしました。

**池上** そこからどのようにして歌謡曲へ？

**田代** レコード会社の廊下を歩いていたら、マヒナスターズのリーダー和田さんとすれ違ったんです。そうしたら「ちょっと待って」と呼び止められて、みんなに「おい、『愛しちゃったのよ』が見つかったよ」とおっしゃったんです。レッスン室へ連れていかれて「こういう歌があるんだ。いっしょに歌わない」と言われたんですけど、歌詞が恥ずかしくて「すみません、恥ずかしいです」と言いました。**池上** いや、あの歌、私にとっても刺激が強かったですよ。そういう時代でしたからね。色っぽい歌ですし、ご両親は反対されませんでしたか。

**田代** やはり歌手になるなんてとんでもないと強く

反対されましたね。でも今思うと、本心は反対ではなかったんじゃないかと思えます。何しろ母は、兄を産むときは新宿の武蔵野館にいたとか、私を産むときも歌舞伎座から運ばれて行ったというエピソードがあるくらい音楽やお芝居が好きなんですから。でも、厳しかったですよ。夜遅くに疲れて帰っても「静かに階段をあがるように」と貼り紙がしてあり、食事ありませんでした。声が出なくなったりきも、「今日は声が出ないので事務所に電話してください」と書いて頼んだら、「自分で勝手に始めておいて、困ったときだけ親に頼むのはおかしい」と。

**池上** プロ意識を叩き込んだわけですね。  
**田代** いえいえ、自分で勝手にやろうと決めたことは、最後まで責任をもつのが人間の決まり事だと言われました。

**池上** その後、三十二歳で突然の病気ですよ。急性すい炎に罹られた。

**田代** ええ。入退院を何度か繰り返し退院しましたが、落ち着いてからは、狭い庭で畑をしたり、お花を育てたり、犬や猫を拾っては一緒に暮らしたりして過ごすようになりました。特に仕事をやめるとも発表せず、ゆっくりと普通の生活に戻ったわけです。

そんなふうに移住していたら、十年くらいたったときに石井先生から、「もう病気が治ったんだし、歌わない？」と。私が尻込みしたら、「これからいいのよ、あなたは。亭主もいるわけじゃなし(笑)」と。**池上** あははは(笑)。

**田代** その言葉で、「そうだな、もう一度歌おう」と思ったんですね。月に一回くらいシャンソニエ(シャンソンの生演奏を楽しめるカフェやレストラン)

ン)でシャンソンを歌いながらレコーディングも始めて、少しずつ活動を増やしました。

父は亡くなるまで一度しか歌を聞きにきてはくれませんでした。母は、十年近く休んで再び歌い始めた私を見て、「あなた本当に歌が好きだったのね」と言ってくれました。一九八九年から「ポップスエ

レガンス」というライブコンサートを始めると、アートフラワーの先生をしていた母がお客様に差し上げる小さなブーケをつくったり、会場を花で飾ったり、何かと協力をしてくれるようになりました。**池上** デビューから四半世紀経って、やっとお母さまが理解してくださった。うれしかったでしょう。

**田代** それは、うれしかったですね。逆に、途中からは、こんなにうれしかったことが、母が倒れたり具合が悪くなったりして、ある日突然途絶えてしまったらと考えると怖かった。「お願いだからお花づくりはやめてほしい」と私のほうから言いました。それ以来、私がお花をいただいて仕事から帰ってくると、「ありがたい、これは私の仕事」と言いながら水切りをして、部屋に飾ってくれていました。

●「世界寺子屋運動」に出合っただけで  
歌えることの感謝を形にする喜び

**池上** 活動を再開されて、歌との関わり方などに変化がありましたか。

**田代** 昔はただわけもわからず忙しかったのですが、再び歌い始めたことで、本当に歌が好きだったんだと私も気がつきましたし、歌わせていただけることへの感謝の気持ちが出てきたんです。この感謝をなにか行動に思っておりましたところに、日本ユネ

スコ協会連盟の発展途上の国への教育支援、「世界寺子屋運動」という活動を知りました。

**池上** 日本ユネスコ協会連盟は、UNESCO憲章の理念に共鳴して、UNESCOや日本ユネスコ国内委員会（文部科学省内）と連携・協力して活動を行っている組織で、UNESCOの下部組織ではなく、財政を含めて独立した民間のNGOですよね。

**田代** はい、民間のユネスコは一九四七年に、世界に先がけ、日本で誕生しました。戦後の貧しさのなかで、「もっと困難な人々のために」との熱い想いの行動がすばらしいと思います。以前からバザーに出品したり、チャリティーコンサートに出演したりと小さな協力はさせていただいておりましたが、一九九六年、いろいろな偶然から、改めて「世界寺子屋運動」についてお話を聞く機会があり、世界中で八億八千万人が読み書き計算ができないことや、その六十四パーセントは女性だと知りました。東南アジアのスラムの寺子屋で学ぶ子どもやお母さんのビデオを見て強い衝撃を受けました。私の知らなかった世界がそこにあったのです。その翌年に初めてインドを訪問しましたが、「こんなにも貧しい生活があるのか」、「極貧というのは、人のつくった罪だ」と思いました。

**池上** 読み書きができないと、大きくなっても就職ができない、仕事が見つからない、そしてまたその子どもたちが貧しい、という負の連鎖が続きます。どこかでその輪を断ち切って、立ち直らせるためにこそ読み書きを教えよう、というのが「世界寺子屋運動」ですね。

**田代** 四歳から十四歳くらいの子どもたちに、国語



### ●田代 美代子（たしろ・みよこ）

1943年、東京都生まれ。歌手。明治学院大学在学中に石井好子氏に師事。日本初のシャンソン喫茶「銀巴里」などで歌い始め、デビュー後は『愛して愛して愛しちゃったのよ』で第7回レコード大賞新人賞受賞。病気のため一時休養したが10年後に復帰。病気療養中、野菜の大切さを知り、2011年に食育ソムリエの資格取得。同年、早稲田大学大学院生として教育学を学ぶ。現在、2ヶ月ごとにコンサート「ポップスエレガンス」を開催するほか、生涯教育・食育等の講演にも積極的に取り組んでいる。

社会、算数を教えるのですが、くじけてしまったり、そこを出て上級の学校に行くといじめられたりする。すると、親に教育の土台がありませんから、「学校なんか行かなくていい」という。

**池上** 親が教育の大切さをわかりませんからね。

**田代** 「世界寺子屋運動」は一九九〇年の国際識字年に立ち上げたのですが、そのときに世界中のメディアが識字問題は深刻なので、人権問題として取り上げようとなりました。日本ユネスコ協会連盟はそれに背中を押されるような形で、大きく展開していったんです。二〇年を越えてようやく、今までほとんど動かなかった識字率が少しずつ上がり始めました。一億千三百万人の子どもたちが学校に通っていませんでしたが、今では五千七百万人くらいです。

**池上** ほぼ半減ですね。

**田代** 二〇周年の報告によりますと、親が教育の大切さに目覚めて、地域を動かし、地方行政に食い込んで、支援をしてもらう仕組みをつくり始めている

そうです。例えば、ネパールではノンフォーマル教育・ナショナル・リソース・センターができました。カンボジアも教育青少年スポーツ省が、ラオスも教育省のノンフォーマル教育局ができました。

**池上** 公的な学校や義務教育がフォーマル教育というのに対して、学校に行かない子どもたちを教育したり、学校に行かないまま大人になった人たちへの日本という生涯学習のようなことを民間がやることをノンフォーマル教育というんですね。そこで難しいのは、やはり、どうやって親に教育の大切さをわかってもらうかでしょうね。

**田代** そうなんです。

**池上** 私も以前、バン格拉デシユの地方の町で子どもたちに教育の大切さを伝えようとしている日本の女性を取材したことがあります。親は最初、子どもに勉強させたいと思わない。働かせたい、あるいは家に置いておきたいわけです。なんとか読み書きを教えてみると、電力会社からの電気料金の請求書の

数字を子どもが読めるようになった。それまでは字が読めないからいくら払っていいかわからず、近所の家に聞きに行っていたけれども、子どもが請求金額を読んでもくれるわけですから「ああ、役に立つ」となりますよね。そこから親が「勉強して来なさい」と後押しするようになったというんです。

**田代** それはすばらしい。

**池上** 実際に役に立つんだということを親に知ってもらうことは大事ですよ。

**田代** そうですね。あとは親自身も学ぶことが必要だと思います。チャリティーコンサートを続けて、二〇〇三年に「田代の寺子屋」をインドの南西部に建てることができました。寺子屋には子どもだけでなく母親のクラスもあるんです。出席簿を見ましたら、始めのころの出席簿には拇印ばかりが押してあったのですが、二年後には拇印ではなく、それぞれのサインがいくつも並んでいたのです。

**池上** つまり自分の名前を書けるようになった。

**田代** ええ。素敵でしょう！

**池上** 勉強して読み書きができるようになったネパール的女性に、「読み書きができて何がいちばんうれしいですか」と聞いたら、「初めて自分の名前が書けたときです」と言っていましたね。名前を書けるというのは、自分を取り戻すということですよ。自分という存在がそこで初めて、世の中に存在する、ということかもしれません。

**田代** 本当にそうですね。また、当初は、女性は発言できない、発言したら村八分にされてしまう、という空気もありました。女性たちはいつもサリーの端で顔を隠し、遠くからうずくまって見ているよう

な状態でしたが、数年後には女性が自信をもって手をあげるようになっていました。自分で小間物屋のような店を始めて少し稼げるようになり、家でも夫が自分の話を聞いてくれるようになったとうれしそうに教えてくれた方もいます。

●教育の機会を広げるために何ができるか  
還暦を過ぎて大学院受験を決意

**池上** とても貴重な経験をしていたら嬉しいです。そしてさらに早稲田大学大学院に進学されました。

**田代** 「世界寺子屋運動」を通して見たこと、感じたことがやはり動機になっています。今の日本がどういう経緯で女性が学べる環境を獲得したか、その歴史を勉強したかったです。

**池上** 世界の女性たちが勉強できない状況であるにも関わらず、日本は勉強ができるようになった、それはなぜなのかを勉強したかったですね。

**田代** 日本も今のような教育を獲得するまでは、

何か大きな運動があったに違いないと思いついて、それを知りました。入学が六七歳。思い立ったのが六四歳前後のことです。歌と並行して三年半ほど受験勉強をしていたんですが、そんななか湯川次義さんがお書きになった『近代日本の女性と大学教育』という本に出会いました。「一九二〇年代において、当時、女性の高等教育に最も誠意をもって取り組んだ人は、与謝野晶子である」という文章があったんです。私のなかでは与謝野晶子といえば『みだれ髪』。大変驚きました。

**池上** もしくは『君死にたまふことなかれ』。

**田代** ええ。いわゆるロマン派の情熱の歌人としてしか知りませんでしたから、「世の中には知らないことがまだまだある！」とうれしくなって、私はこの先生のゼミに入りたいと。それで絶対早稲田大学の大学院だと思っただけです。

**池上** 大学院の教育学は普通、教育学部で基礎をやってきた人向けですから大変でしたでしょう。



●池上 彰 (いけがみ・あきら)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。東京工業大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊子どもニュース」のお父さん役を務め、子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。2014年は9月までにアラブ首長国連邦、パキスタン、フィリピン、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、トルコを取材。『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』（文藝春秋）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など、著書多数。



**田代** それは大変なことでした。歌の仕事もありま  
すし、そうそう集中力が続く歳じゃありません（笑）。  
受験勉強をして壁にぶつかると、歌のレッスン。歌  
のレッスンに飽きると受験勉強。気持ちの切り替え  
ができてよかったですね。

**池上** そして、無事に二〇一一年四月に早稲田大学  
大学院教育学研究科修士課程に入学された。

**田代** 入学後、与謝野晶子の研究に力を注ぎました。  
待ち望んでいた研究の日々は素晴らしいものでした。  
知らないことを知り、浮かんた疑問を各方面から検  
討し分析し、自分流に証明する喜び、興奮がありま  
した。この「学びの興奮」を子どもたちにも体験し  
てほしいです。

●東日本大震災前に歌わせていただいた町を訪れ、  
歌の力を知る

**池上** 二〇一一年といえば、東日本大震災の年です

ね。入学直前に震災が  
ありました。何か影  
響はありましたか。  
**田代** 震災後、「入学  
式は自粛し、授業は五  
月の連休明けより」と  
の通達を学校から受け  
取った私は、歌の仕事  
のオフアアを受けるこ  
とにし、ニューヨーク  
へ参りました。重たい  
心で向かったニュー  
ヨークでしたが、街行

く人々にお見舞いを言っていたり、多くのレ  
ストランにチャリティメニューがあったりと、あた  
たかなフレンドシップを感じました。また、あるビ  
ルで風にはためく「日の丸の半旗」を目にしたとき  
は涙があふれて、ありがたうを繰り返しました。

被災地となった東北は、ほとんどの地域でかつて  
歌わせていただいていますので、街並み、景色、そ  
して触れ合った方々のお顔も思い浮かび、胸が締め  
付けられる思いでした。日本に帰ったら東北に伺い  
たい、私にできる限りのお見舞いと励ましをお伝え  
したい、私にできるのは歌わせていただくことだと  
思いました。一緒に歌い、語り合い悲しみを共有し、  
明日への希望を歌いたい思いで『みどりのふくし  
ま』\*という歌をつくって、仮設住宅の集会所や広  
場に伺うようになり、現在も続けて歌わせていただ  
いています。この活動は九州時代の私の母校、西南  
女学院の同窓会の仲間がサポートしてくれており、  
いつも感謝しております。

**池上** 歌の力、再認識されたでしょうね。

**田代** はい。歌は、喪失感で縮こまってしまった心  
にも、ストレッチにすっと入ってくれるものなんだ  
なあと実感しました。『みどりのふくしま』のなか  
の「人はひとりじゃないから 晴れる日がまたくる」  
と歌うときにはいつもこみ上げてきて、必死で涙を  
こらえます。そして「どうか希望をもって！」と歌  
わせていただいています。

ところで、正直なところ、私、『愛しちゃったの  
よ』がそのころになっても恥ずかしくて仕方がな  
かったんですね。でも、私より年齢が上のおばあさ  
まが、私にカラオケで歌ってよと言われたときに、

仕事の歌は歌いませんってお断りしてしまつたんで  
す。そうしたら、「じゃあ私が歌うわ」と言って、  
『愛しちゃったのよ』を楽しそうに歌いながら踊ら  
れて、「これが楽しみ」とおっしゃつたんです。私  
もうびっくりして、自分はなんて生意気なことを  
言つたんでしょうと思いました。「ごめんさいね、  
私、歌う。私も踊るから」と言って一緒に歌いまし  
た。歌というのは、瞬時にしてその歌が流行ってい  
たころ、そのころの幸せ、そのころの恋、いろいろ  
なことを思い出させてくれるものなんです。

**池上** なんとなく恥ずかしかった自分の歌が、誰か  
の人生の思い出、生きがいになっていた。

**田代** ええ。私こそ、あの歌のおかげで今も歌つた  
り、いろいろな仕事をさせていただいている。あの  
歌のおかげだと思えるようになりました。

そうして復興支援活動に奔走しているころ、ご縁  
をいただき帝国書院『歌がつむぐ日本の地図』の編  
集にも携わることとなり、『みどりのふくしま』も  
本書に掲載していただき、付録CDにも収録するこ  
とになりました。

**池上** シャンソンから巡り巡って、『歌がつむぐ日  
本の地図』にたどり着いた。

**田代** 本を手にした方から、「家族で一緒に見て  
楽しんでいきます」、「震災で家族と離れているけれど  
も、これを見ながら『おじいさんの家はここのよ』  
といった話が子どもとできる」、「今はもう体が動か  
ないけれども、歌を聴きながら、若いころに旅行し  
た思い出の場所を眺めるのはとてもうれしい」とい  
うご意見をいただきました。これをきっかけに、私、  
演歌も大好きになりましたし、やっぱりみなさんの

\*特別付録 復興応援曲『みどりのふくしま』／守るべきもの—東日本大震災を経験して—をご参照ください。

心に残る歌はそれだけ魅力のある歌なんだなあと  
思いました。被災地では、昔の歌に本当に目を輝かせ  
てみなさんがいっしょに歌ってくださいます。

池上 何ですかねえ、なつかしい歌を歌っているう  
ちに涙が出てきちゃうというのは。

田代 今はもう戻れないところに、素直にすっぱ  
り戻れるんじゃないですかね。現実にはなかなかそ  
うもいきませんけれども。大衆芸能はすごい力を  
もっていると思います。日本は農耕民族で、稲作は  
ひとりではできませんから、家族や集落みんなで力  
を合わせて作業をして、感謝しあって、支え合っ  
てお祭りをしてきました。日本人の社会に、みんな  
歌ったり踊ったりすることは欠かせません。

池上 今でこそ日本人は仕事一本槍に見えますけれ  
ども、それこそ明治の初期くらいに日本に初めて来  
た外国人が、日本人は土木作業でもなんでもすぐ  
仕事を途中でやめて、みんな歌ったり踊ったりし  
ている、と驚いたという話もありますものね。

田代 私たちの祖先は、そうしてねぎらいあい、感  
謝しあったんでしょうね。

●現場の先生方にも伝えたい  
与謝野晶子の教育に対する理念

池上 最後にりましたが、これをお読みになって  
いる先生たちにメッセージをいただけませんか。

田代 私が大学院で学び研究しました与謝野晶子は、  
一八七八年に生まれ、一九二一年に文化学院を創設  
されています。与謝野晶子の教育論や女性論は今の  
世でも立派に通じる確たるものです。古典で培った  
東洋思想とデモクラシーをつなぎあわせ、見事な新

しい思想をつくり上げた。彼女が学んだなかに、忘  
れられない言葉があります。もとは左右田喜一郎が  
ハインリヒ・リッケルトに学ばれた言葉で「人類無  
階級的連帯責任主義」というものです。男女、人種、  
貧富、貴賤など、さまざまな差別を全部取り払って、  
みんな自由で平等なのだ。第一次世界大戦前の一  
九一二年にイギリスで彼女が見たのは、ロンドンで  
の女性の参政権獲得運動でした。「自分の目にはと  
ても進歩的に見えるヨーロッパも、少し前までは差  
別があった。この方たちは闘っている」と。女性問  
題は人間の問題だから、男女同等の教育を与えるよ  
うにということをおっしゃるわけです。

帰国後、文化学院を建てたとき、彼女の教育理念  
がそこに打ち出されました。画一的でなく、個性重  
視、全科目ができなくてもいい。どんな人でも何か  
ひとつ秀でたものがあるはずで、それを磨くのが教  
育だ、という理念です。なんと百年前に、「女性も  
国家を支える人、世界人となれ」という世界観を  
もっていた。学校をつくるにあたって集められた教  
授もそうそうたるメンバーです。顧問が山田耕筈。  
有島武郎、芥川龍之介、井伏鱒二、川端康成。

池上 大宅壮一、北原白秋、菊池寛、小林秀雄、高  
浜虚子、横光利一……。これは豪華ですね。

田代 この方たちを集めたのは晶子さんと寛さんの  
お力だそうですね。何しろ本物を実感させる授業を、  
というのが、晶子さんのテーマでしたから。職員室  
はサロンさながらだったそうですね。こうした講師陣  
の豪華さはなかなか実現できませんが、いま現場に  
いらっしゃる先生方には、「その生徒の秀でたもの  
を見つけてそれを磨く、画一的ではない教育、そし

て本物を実感させる教育を」と、与謝野晶子さんの  
思いをお借りしてお伝えしたいと思います。

そして私からもひとつ、「人は誰も皆、なくては  
ならない大切な人だ」と教えていただきたいです。

池上 田代さんは、ご自身の「歌う」という秀でた  
ものを磨いて、そこから学びたいという意欲を広げ、  
おいくつになっても学ぶ姿勢をもち続けていらっしや  
いますね。今日は私も、与謝野晶子の新たな側面を  
知る機会となりました。ありがとうございました。



対談を振り返って

五十歳を過ぎてから、教育の大切さに目覚め  
た田代さん。世界の子どもたちが読み書きでき  
るようにしようという運動に協力しながら、自  
らも勉強に励むようになりました。改めて大学  
院に通い、与謝野晶子にもうひとつの顔を知っ  
たとのこと。自分が学ぶことで、学ぶことの楽  
しさを世界の子どもたちにも伝えることができ  
るのですね。

いつまでも学ぶことを忘れない田代さんは、  
お会いしたのは初めてですが、その若さに圧倒  
されました。学び続けている人は、老いること  
がないのだと痛感しました。

好評発売中!

歌がつむぐ日本の地図

A4判、二〇〇頁、本体価格二四〇〇円+税

